# 選抜システムと中学生の競争意識

## －東京の事例に関する社会学的考察－

比較教育社会学コース　藤　田　武　志

A Case Study on the Competitive Consciousness of Middle School Students in Tokyo :

An Analysis Focused on the Relationship between the Entrance Examination System and the Individuals

Takeshi FUJITA

The purpose of this paper is to advance a new hypothesis to explain how Japanese middle school students think of the competition occurred in the high school entrance examination.

Some studies pointed out that Japanese middle school students compete against each other hostilely in the entrance examination because the competition is a zero-sum-game in which one's success prevents another from succeeding. There is, however, room for argument on this point for following two reasons. First, middle school students do not necessarily have the same idea as the above in their face-to-face interaction in their school. Second, the system of high school entrance examination differs in each prefecture in Japan, so that the students'competitive consciousness is not always the same under different systems.

For the reasons given above, I have examined the subjective views of Japanese middle school students on the competition of the high school entrance examination in connection with the entrance examination system in Tokyo.

A discussion of the issue leads me to the following four points. First, there are a great number of high schools in Tokyo and it has two effects. One is that the middle school students in Tokyo have more opportunities to choose and apply to high schools than other students in other prefectures. The other is that there are few students who apply to the same high school from one middle school in Tokyo in contrast to the cases in many other prefectures. Second, most of one's rivals who apply to the same high school as he, exist not in his own school but in the outside of his school. In other words, the students in Tokyo compete with others outside of their school while the students in many other prefectures tend to compete against others inside of their school. I call the former type of competition "a open competition" and the latter "a close competition". Third, "a open competition" relieves the zero-sum-game in one school because there are few competitors who prevent each other's success. In this case, a device to know one's position in the competition is not the relative position of his educational attainment in his school but Hensachi, a standard deviation score, which shows his relative position of his test performance in a larger mass of middle school students scattered in the whole Tokyo. Fourth, for these three factors mentioned above, one's schoolmates are not his enemies who scramble for the same goal but his comrades who fight against thier common enemy, the entrance examination. As a result, middle school students regard the competition of the entrance examination not as a hostile one against their schoolmates but as a "individual" one against themselves. That is to say, "individual" competition is an isolated process of exerting the effort to raise their Hensachi with self-restraint.

目　　次

Ⅰ　はじめに
　A　先行研究の検討と主題の設定
　B　研究方法
Ⅱ　受験システムと受験競争観
　A　東京の受験システムの特徴
　B　「学校内に閉じた競争」と「学校外に開いた競争」
　C　「個人化された競争」
Ⅲ　考察

## Ⅰ　はじめに

### A　先行研究の検討と主題の設定

日本の高校受験では中学生が競争に駆り立てられ，受験勉強の努力が中心となるような生活，すなわち「受験体制」へと包絡させられていくと言われる[1]。業者テストなどで算出される偏差値は受験競争を激化させると言われ[2]，1994年度から中学校内での業者テストが禁止され，進路指導でも偏差値が使われなくなった。また，文部省の調査によれば，1976年に中学３年生の通塾率が37.4%であったのに対し，1993年度は67.1%に急増しており，受験競争の激しさを物語っている。

この受験競争加熱の説明根拠として竹内は，受験システム刻印論の立場から受験システムの自律化／自己準拠化を挙げる[3]。竹内は，受験競争加熱の説明根拠を学歴収益率などの学歴の機能的価値（学歴社会Ⅰ），学歴への人々のまなざしといった学歴の象徴的価値（学歴社会Ⅱ），相対的に自立化した受験システム（受験社会）の三つに分節化する。しかし，僅差の学校ランクの違いが将来の地位達成（学歴社会Ⅰ）や，まなざしとしての学歴（学歴社会Ⅱ）に持ち越されるわけではないため，激しい受験競争を十分に説明するには，学校ランクや偏差値ランクがそれ自体として競争の報酬や意味の根拠となるような自己準拠化した受験システム（受験社会）に焦点を合わせる必要があるという。そして，高校受験の競争加熱を受験システムとの関連から次のように説明する。大学はもちろん高校もすべて序列化されており，細かな学校ランクによる傾斜的選抜システムが日本の教育選抜の特徴である。傾斜的選抜システム社会では，合格可能性を知るための模擬試験などが日常化し，「自己選抜」[4]が制度化している。自己選抜が過大なアスピレーションを冷却する一方，傾斜的選抜システムは自分なりの目標に向けて中学生を再び加熱する。このようにしてほとんどすべての者が競争に取り込まれていくという[5]。それでは，ここで言われる競争とはいったいどのような様相を呈していると言われてきただろうか。

竹内はこの点について次のような指摘をしている[6]。学校で生徒たちは上級学校を目指して競争関係にあるが，必ずしもお互いを敵とは考えない「協調的競争」[7]を行っていたという。それは現在でも大学受験を目指す高校生の間に見られるものであるが，ゼロ・サム・ゲーム的である高校受験競争の中にある中学校ではもはや協調的競争は作動しておらず，中学生たちが「各人の各人に対する戦争状態」という「ホッブス的世界をリアルに体験してしまっていないかどうか，考える必要がある」[8]というのである。

久冨はそのような高校受験競争の状況を次のように分析する[9]。まず競争激化の過程を三つの時期に区分する。第Ⅰ期は新制中学校発足から1959年までであり，高校進学率は40～50%，競争は経済的・文化的に抑制されていた「抑制された競争の時代」である。第Ⅱ期は1960年～1974年の教育爆発の時期である。この時期の競争は，一方でほとんどすべての国民諸層に進学競争が開かれ，他方で進学への見通しが開かれたという二つの意味において「開かれた競争」として特徴づけられる。第Ⅲ期は，1975年から現在に至る，進学率が頭打ちになった時期である。この時期は，一つには競争間口が開かれていた第Ⅲ期との関連において，いま一つは競争が子どもにもたらしている閉塞性において「閉じられた競争」として特徴づけられる。そして，現在の高校受験競争はゼロ・サム・ゲームであり，競争者相互の関係を著しく対立的にし，ただでさえ激しい競争をいっそう激化させる「敵対的競争」になっているというのである。

しかし，高校受験競争に関して竹内や久冨が指摘するような状況は必ずしも全国的に一様だとは言えないのではないか。たとえば筆者の調査した東京のある中学校は[10]，「高台に位置し，保護者の教育に対する意識も高い」[11]地域にあり，中学３年生の通塾率も81.7%と文部省調査よりもかなり高く，受験競争の加熱ぶりが伺われた。それゆえ生徒たちは，上記のような「敵対的競争」状態に置かれていると予想された。しかし，それに反して同校の中学３年生のうち約７割もの生徒は受験に至る過程を友達との競争だとは感じておらず[12]，友達との関係についても７割以上の生徒が気持ちが離れたり気まずくなったりしなかったと答えている[13]。これは，この中学生たちは受験に至る過程を「敵対的競争」的ではなく，「協調的競争」的なものとして構築していることを示していよう。

高校受験競争に関してこのようなヴァリアントを生じ

させる要因として，選抜システムの多様性を挙げることができよう。なぜなら，全国区的な大学受験とは違い，高校受験の選抜システムは都道府県によって大きく異なるからである[14]。受験システム刻印論的立場に立つならば，受験システムが異なれば競争の様相にも相違が生じると考えられるだろう。しかしこれまで，能力の捉え方や努力のありようが選抜システムによって社会的に構成されていることは指摘されているが[15]，選抜システムと，そこで構築される競争の様相との関連については必ずしも考察されてきてはいない。それゆえややもすれば，選抜システムの違いを考慮しないために，受験に関するさまざまな地域の中学生の経験も「敵対的競争」や「競争」という言葉だけでこれまで同質化されてきてはいないだろうか。

そこで本稿は，各地域の受験競争の様相を解明する第一歩として，東京の中学生が激しい受験競争の下で「協調的競争」的な競争意識を形成するメカニズムを検討し，選抜システムと個人の相互関連に関する仮説を生成することを主題とする。そして，そこで見出された知見から得られる示唆と今後の課題について最後に考察する。

### B 研究方法

本稿のデータは，東京の副都心を擁する区にある公立中学校の一つである「第三中学校」（以下「三中」と呼ぶ）で1992年度に行われた以下の調査に基づく[16]。第一に中学3年生の智子・雄一・和夫という男女3名と，彼らの母親への聞き取り調査である。これらはすべてインフォーマル[17]な形式で行われ，中学生には志望校選択，受験イメージ，偏差値，友達や先生との関係，塾など多岐にわたる聞き取りをした[18]。また，母親には，志望校選択，学校や塾，受験に対する不安，子どもの様子などの事柄に関して聞き取りをした[19]。第二に，三中の3年生全員に対して受験前の12月と受験後の3月に行った選択肢式の質問紙調査（以下「第1回調査」，「第2回調査」と呼ぶ）である。「第1回調査」では志望校選択，学校の先生，家庭，塾，友達関係，進学希望，成績などの項目を尋ねている。「第2回調査」では，決定した進路，偏差値，塾，友達関係といった項目について尋ねている。第三に，三中の進路指導主任と生徒指導主任の教師への聞き取り調査である[20]。彼らは第3学年の担任教師でもあり，インフォーマントたちや進路指導の様子などについて尋ねた。その他，調査の過程で得られた文書資料なども活用した。

## II 受験システムと受験競争観

### A 東京の受験システムの特徴

はじめに本稿のデータソースとなる三中とインフォーマントについて概観しよう。まず三中は，区内でもっとも伝統のある公立中学校の一つである。高台の住宅地に位置しており，全校生徒305人，そのうち第3学年は3クラス115人であった。生徒たちの学力はかなり高く，聞き取り調査によれば，業者テストで学校の偏差値が都内で上から3番目だったこともあるという。そのため内申の取りにくい学校だと言われている[21]。そして，例年100%の生徒が進学しているという。「第1回調査」によれば，3年生の通塾率は81.7%とかなり高く，通っている塾についても「有名高校受験を目的とした進学塾」と答えた生徒が通塾者中の53.2%を占めている[22]。また，大学までの進学を希望する生徒が73.0%を占めており，高卒後に専門学校などへの進学を希望している生徒も含めれば86.0%となる。さらに智子の母親によれば，中学受験を経験した生徒も少なくないようである[23]。

次に，インフォーマントの3人は同じ進学塾に通う三中生である。3人とも長子であり，それぞれの家庭は高校受験を初めて経験する。両親はみな大学卒[24]で，3人とも大学進学まで希望している。智子は，担任教師によれば礼儀正しくおとなしい生徒である。黙々と勉強しており，英語への興味から，ある都立高校の英語コースを志望している。成績は中の上というところで，通知表には5段階評価の3と4が同数程度であった。雄一について担任教師は，目立たなく控え目であるが，頑張り屋で部活動を一生懸命しているという。また，志望校はかなり迷ったが，最終的に私立高校の単願推薦を利用したという。成績は中程度で，通知表の評定はほとんどが3であった。和夫は担任教師から真面目な生徒として評価を受けており，バレー部の副キャプテンと生徒会副会長をしている。志望校は，ある私立大学の付属校で，成績は上の中というところで通知表の評定はほとんどが4である。

さて，はじめに記したように三中の3年生たちの多くは受験に至る過程を「敵対的競争」としてではなく，むしろ「協調的競争」的なものとして構築している。なぜなら，前述したような諸条件，つまり位置する場所，通塾率や大学進学希望率の高さ，生徒たちの学力の高さといったことから，競争主義的秩序の中に組み込まれていると考えられる一方で，受験に至る過程を友達との競争としては意識していないからである。

この点において，競争意識自体が見られないという次

の事例とは異なる。西田は「南中」という尼崎市の公立中学校では生徒の間に競争意識があまり見られないことを見出し，その要因としてブルーカラー労働者の比率が高いという地域特性と，公立高校の「総合選抜制度」[25]という受験システムの二つを挙げる[26]。つまり，第一にブルーカラーの「実学志向」という文化によってその地域はあまり競争主義的ではなく，第二に，総合選抜制度の下では成績が一定のレベルに達していれば確実にどこかの高校に合格できるために競争意識が刺激されないというのである。競争意識の低さは，南中で塾に通う生徒は50数パーセントであり，その主要な理由も「学校の勉強に遅れないため」というものであること，大学・短大まで進ませたいという親は全体の4割ほどにとどまることが傍証している[27]。一方，三中の場合は，先に見たように地域特性においてこの事例と大きく異なり，競争意識自体が見られないのではないと考えられる。では，受験システムについてはどうだろうか。1996年現在の東京都立高校入試は中学生が特定の高校を志願する「単独選抜制」であるが，インフォーマントたちが受験した1993年度入試には「グループ合同選抜制」と言われる変則的な総合選抜制度を採用していた[28]。このシステム下では，「グループ合格」の枠内に入ればいずれかの高校には確実に合格できるため，西田の言うように競争意識を低減させる要因となろう。しかし，後述するように東京の高校受験においては私立高校の存在を無視することはできない。また「第2回調査」によれば，三中の生徒のうち都立高校に進む生徒は28.0%に過ぎず，70.0%の生徒の進学先は私立高校であった[29]。そこで，三中の生徒たちの競争意識と受験システムの連関についてさらに詳しく検討するために，私立高校も含めた東京の受験システムの特徴を概観しよう。

東京の受験システムは，受験機会という点で他府県と大きく異なる。それには，高校数の多さ[30]とともに，私立高校の存在が大きく影響している。日本全国の全日制高校における公立と私立の学校数の内訳は，公立が72.3%，私立が27.3%となっている[31]。その比率を大都市（政令指定都市）を擁する都道府県で比較してみると表のようになる。

表から明らかなように，公立高校よりも私立高校の占める割合が高いのは東京だけであり，他府県とは著しい対照をなしている。受験機会という点から，東京に次いで私立高校の割合が高い京都，大阪，福岡県と比較検討してみよう。

京都，大阪，福岡の高校受験システムと東京のそれには二つの相違がある。第一に，受験可能な私立高校の数の違いである。東京も含め，ほどんどの府県では公立高校入試が同一日に実施されるため，受験可能な公立高校は1校に限られている。一方，私立高校入試の場合，大阪府・京都府・兵庫県は協定を結んで三府県で同一日に私立高校入試を行う[32]。同様に，福岡県の私立高校入試は2月初旬に統一的に行われる[33]。それゆえ，県外受験を除けば，これらの地域においては公立高校と私立高校のそれぞれ1校の受験が可能である。それに対して，東京のほとんどの私立高校は2月中旬の3日間のうちいずれか1日を受験日としている[34]。つまり，東京の中学生は私立高校の複数受験が可能なのである。

表　公立高校と私立高校の割合

| | 学校数の割合 | |
|---|---|---|
| 都道府県 | 公立（%） | 私立（%） |
| 北海道 | 80.7 | 19.3 |
| 宮城 | 80.2 | 19.8 |
| 千葉 | 70.9 | 29.1 |
| 東京 | 40.0 | 60.0 |
| 神奈川 | 67.0 | 33.0 |
| 愛知 | 73.7 | 26.3 |
| 京都 | 55.4 | 44.6 |
| 大阪 | 62.1 | 37.9 |
| 兵庫 | 73.6 | 26.4 |
| 広島 | 70.3 | 29.7 |
| 福岡 | 59.5 | 40.5 |

文部省（1993）より作成。
ただし、国立高校は除いた割合である。

第二の相違点として，私立高校の高校序列上の位置が挙げられる。高校間には伝統や入試の難易度などによる序列が存在する。ところが，多くの府県において，私立高校は序列上の上位か下位を占めていることが多い。そのため，私立高校はいわゆる「目標校」や「滑り止め」として位置づけられることとなる[35]。この場合，私立の「目標校」は一握りの学業成績上位者だけの志望対象となり，大多数の生徒にとって私立高校は，事実上公立高校の「滑り止め」としてしか機能しないことになろう。つまり多くの場合，私立高校はぜひ進学したい志望校の一つとしては数えられないのである。それに対し，東京ではいわゆる「中堅クラス」の私立高校が多数を占めている。また，都立高校と同等かそれ以上のステイタスをもつ私立高校も多い。この場合，私立高校は十分に第一志望校たりうるのであり，都立高校が「滑り止め」となることも少なくない。つまり，東京の中学生は「滑り止め」以外にも，ぜひ進学したい高校をさらに複数選定で

きるのである[36]。

以上のように，私立高校の割合の高い府県と東京の高校受験システムとの間には大きな差異がある。この差異は，私立高校の数が少ない府県と比べるならばさらに大きくなると考えられる。それでは，以上の東京の受験システムの特徴と，受験を友達との競争と感じないという中学生の意識とはどのように関連しているのだろうか。節を改めて考察しよう。

### B 「学校内に閉じた競争」と「学校外に開いた競争」

前節で指摘したような東京の受験システムの特徴は，個々の中学生にはどのように影響しているのだろうか。

聞き取り調査で志望校について尋ねた際，たとえば和夫は「高校の数がすごくあって，選択に迷っちゃって」と言う。また，和夫の母親は，「福岡から転勤してきましたのでね，全然そういうこちら（東京）の入試の体制なんかもまるっきり違うわけですよね。向こうだともう，県立志向で私立は滑り止めっていう感じで，それから学校数も少ないですからね，そんなに学校を選ぶのに苦労がないって言うか」と語った。すなわち第一に，高校数の多さから，志望校の選定に苦労するほどの受験対象校の多様性が結果していると言える。

また，和夫に同じ志望校の友達が学校にいるかどうか尋ねると，「一人二人はいます」と答えた。また雄一に，志望校の決定に同じ高校を志望する友達の影響があったかどうかを聞くと，「あまりない」と答えた。その理由をさらに尋ねると「(同じ高校を志望する友達は）知らなかったから」と言う。さらに，和夫の母親は「学校の中から過去の進学状況のリストとか見せていただくとね，要するに，一つの学校にお二人とか三人とかそういうふうに，その，学校がたくさんあるために分かれていきますよね」と語った。ここから第二に，一つの中学校の中に同一高校を受験する生徒数が少なくなることが看取される。

東京の受験システムは，個々の中学生に上記の二つの影響を与えていると考えられる。このことは次の資料からも傍証される。三中と通学区が隣接する区立北中学校の発行した『平成4年度進路指導の手引き』には，平成元年度から3年度までの卒業生合格校一覧が記載されている。それによると，たとえば平成3年度に合格者があった高校は，普通科に限っても都立校が14校，私立校が67校の計81校にのぼる。これに職業科や専門学校を含めればその数はさらに増加する。一方，もっとも合格者の多かったのはある私立高校の9名（1校）で，少なかったのは1名（33校）である。平均すると，記載されている高校1校につき2.6名となる。9名の合格者がいる高校の入試の実質倍率は例年2倍前後であるため，北中からこの高校を受験した生徒は十数人程度と推測される。しかし，この高校のように多くの合格者のある高校は少ない。つまり，北中から同一高校に出願した生徒は多くの場合数人程度なのである。このような状況は他の年度でも同様である。三中の資料は入手できなかったが，上記の聞き取り調査からも状況に大きな相違はないと考えられる。

これに対して次のような状況の県もある。たとえば，学校社会学研究会が研究対象とした「地方都市」の中学校の生徒の主たる受験対象校は，公立と私立とを合わせた計14校23学科（職業科も含めている）が挙げられている[37]。また，乾と平塚が研究対象とした長野県のある学区に存在する高校は，私立高校も含めて7校であるという[38]。

東京のように受験対象校が多様で，同一高校を志望する相手が一つの中学校内に少数である場合とそうではない場合とでは，競争に関してどのような相違が生じるだろうか。まず，受験対象校の数が限られている場合については次の二点が指摘できよう。第一に，高校間序列が中学生のみならず，地域の人々に対しても明確で，可視的になる点であり，第二に，中学校内部の競争が志望校の合否に直接結びつきやすくなる点である。乾と平塚は，彼らの研究対象地域では「県に戻ってくれば，何大学の出身者であるかよりも，何高校の出身者であるかの方が話題・評価の対象になる」ゆえに，大学受験に関して比較的「のんびり」しているのに対し，「高校受験に向けての競争関係が強く組織される」と指摘する[39]。この場合，中学校内部の競争がゼロ・サム・ゲーム的様相を強めることとなろう。

一方，受験対象校が多様である東京の場合は上記の場合と対照的である。すなわち第一に，高校間序列の明確性・可視性・安定性が相対的に低くなるのである。もっとも，高校受験案内などの書籍，塾やテスト業者などが配布する高校のランク表には偏差値による微細な高校序列が掲げられてはいる。しかし，次の事情から実質的に高校序列が不明確なものとなるのである。インフォーマントである三中の中学生たちがそろって通う進学塾で配布された国立・私立高校偏差値ランク表には，男子は153，女子は176の高校が記載されており，たとえば偏差値60のところには男女ともに10校ずつランクされている。そしてこの数字にはさらに都立高校が加わるのである。また，偏差値60の前後を加えてランク表を見れば（偏差値59～61），男子が16校，女子が19校となる。さらに，こ

の偏差値ランクは年度によって細かく変動するのみならず，数年・十数年単位では大きな変動も生じる[40]。このような事情から，中学校の生徒のみならず教師も，ランク表などを参照することなしに細かな高校序列を正確に言い当てることは困難となる。実際，三中の職員室にはテスト業者から提供される資料だけでなく，市販の各種高校受験案内も数冊常備されており，筆者がそのことについて言及すると，進路指導主任は「活用してますよ，実際」と語った。

対照的な第二の点は，一つの中学校内で同一高校を受験する人数が少ないため，中学校内での競争がそのまま志望校の合否に結びつくと意識されにくくなる点である。聞き取り調査で和夫は，自分の通う塾の友達の志望校が気になると述べた後に，その理由を「(志望校が) 同じ高校だったらライバルになりますから」と語った。彼は学校内にいる同一志望校の友達は一人か二人だと言っていることからも，学校内には「ライバル」はほとんどいないことになる[41]。雄一の場合は，自分と同じ志望校の友達は知らなかったということからも，前述のように「友達と競争している感じはない」という意識を持つに至ると考えられよう。東京の場合，同一高校を志望する中学生は学校内ではなく，学校の外に多く存在しているため，ある生徒の学校内での学業成績の相対的位置が他の生徒より高くても，必ずしもそれは自らの志望校に合格する可能性が高いことを意味しないのである。

上の指摘に対しては太田の議論が示唆的である[42]。太田は，ゼロ・サム競争とノン・ゼロ・サム競争に関して次のように述べる。閉鎖的な組織内部での出世競争の場合はゼロ・サム原理を基調とする結果，横並びの競争による選別強化へと進んでいく。その一方で，医師や科学者，デザイナーといったプロフェッショナルのように，競争の行われるフィールドが外部に開かれている場合には，分割されるパイの大きさが決まっていないためにゼロ・サムの関係が崩れることになる。もっとも，厳密に言えば成功者の裏に成功しない者がいることに変わりはないため，字義通りにノン・ゼロ・サムとは言えない。しかし，フィールドが開かれている場合には地位や評価のヒエラルキーは必ずしも明白ではなく，競うべき相手は不特定多数に近いため，社会構造と人間の認知能力を考慮すれば，ゼロ・サム状態は緩和され，過当競争などの社会的弊害も回避されると考えるのである。

太田の主張は一般社会の出世競争を対象としており，高校受験競争にそのまま適用可能ではない。しかしこれまでの考察からも，太田の主張と同型的な次のような構図を看取できよう。受験対象校が限られている場合には，学校内での相対的位置が高校序列に対応し，学校内での競争が入試の合否に結びつけられやすい。そのため，「閉鎖的な組織内部」でのゼロ・サム的競争となると考えられる。これを「学校内に閉じた競争」と呼ぼう。それに対して受験対象校が多様な場合，同一のパイをめぐって競争する相手は学校内には少なく，そのような競争相手のほとんどは学校外に広がった大きな中学生集団に散在している。そのため，学校内での競争が必ずしも入試の合否に結びつくわけではない。その結果，マクロ的に見ればゼロ・サム競争であっても，学校内にはゼロ・サム状態の緩和した状態が出現する。この場合，競争に参加する諸個人にとって，競争のフィールドは学校内にとどまらないことになる[43]。そのような競争を「学校外に開いた競争」と言うことにしよう。

以上から，東京の高校受験競争は「学校外に開いた競争」となっているため，前項で指摘したように，7 割近くもの生徒たちが受験に至る過程をクラスや学校の友達との競争として感じないという事態が生起するのだと考えられる。

### C　「個人化された競争」

前節で指摘した「学校外に開いた競争」の下で，中学生たちはどのような競争意識を形成しているのかさらに考察しよう。

まず，「競争主義的秩序を駆動する」[44] と言われる偏差値をめぐる中学生の意識から検討していこう。内申点と偏差値の重みの違いについて尋ねた際，雄一は「偏差値のほうが本当っていうか，重みがあるっていうか」と述べ，和夫は「一応やっぱり，偏差値のほうが重い」と答えた[45]。彼らはなぜ内申点よりも偏差値を重く見るのだろうか。藤田はこの原因について，偏差値は業者テストなどで繰り返し中学生たちに提示され，高い合格予測力を持つと見なされていることを挙げている[46]。選抜システムと関連させるならば，次のように理解できよう。「学校内に閉じた競争」での競争相手は同じ学校の友達である。それゆえ，彼らにとって重要なのは中学校内部の自らの相対的位置であり，それは内申点として可視化される。ところが「学校外に開いた競争」の場合，競争相手は同じ学校の友達よりもむしろ学校外に広がる中学生集団の中で同一高校を志望する中学生であり，いわば「匿名の相手」との競争となる。実際，偏差値とはどのようなものかを尋ねると，和夫は偏差値が学力の値だと答えた後に，「(学力は) やっぱり全体から見て…，結局相手と比較する…」と述べた。また雄一は，偏差値が学力を表しており，学力は自分の位置を示すと述べた後，

自分の位置とは学校の中での位置か，それとも学校の外の中学生も含めた集団の中でのそれなのかを尋ねると，しばらく考えた末に「でっかいほう」と答えた。つまり彼らは，「学校外に開いた競争」状態に置かれ，そこでは偏差値を媒介とした「匿名の相手」との競争を強いられているがゆえに，自らの志望校選択と高校受験の合否を予測する指標として，学校内における相対的位置ではなく，もっと大きな中学生集団における相対的位置を示す偏差値を重要なものとして意識せざるをえないのである。

では，具体的な相手との競争と，匿名の相手とのそれとはいかに異なるのだろうか[47]。同一学校内の具体的な相手との競争では相手に関する情報を入手しやすい。たとえば，相手がどれくらい努力をしているか，学校内の誰がどの高校を受けるか，教師に合格を保証された生徒は誰で，逆に再考を促されたのは誰かといった具体的な情報を入手できる可能性が高い。競争相手の中における自分の位置を日常的な対面的相互作用の中である程度把握でき，自らの志望校選択や合否予測もそのような具体的な情報によって行えるのである。それに対して匿名の相手との競争では，競争相手の様子を対面的相互作用の中で伺うことはできない。もちろん学校の日常的相互作用の中で級友に関する情報を得ることはできる[48]。しかし，一方の目標達成が他方のそれを阻害するような競争相手，すなわち同一の高校を目指す競争相手は一つの中学校を越えた大きな中学生集団に散在しているため，そのような競争相手の具体的な情報は得られない。それら匿名の相手の中での自らの位置は，唯一偏差値という抽象的な情報によってのみ知ることができるのである。この場合の競争は，具体的な他者との関係においてではなく，自分と抽象的な偏差値との関係において生起するものとして捉えられるようになると言えないだろうか。この点について「第1回調査」では，「受験は他の中学生との競争と実感するか，あるいは，自分自身との戦いだと実感するか」という設問に対して，競争だと実感すると回答した生徒は16.5%に過ぎず（競争だと実感している：5.2%；どちらかといえば競争だと実感している：11.3%），逆に自分自身との戦いだと回答した生徒は71.3%にも達したのである（自分自身との戦いだと実感している：44.3%；どちらかといえば自分自身との戦いだと実感している：27.8%）。ここからも理解されるように，東京の高校受験システムという枠組の下での競争を，中学生たちは具体的な他者とつながる形で生起する「敵対的競争」ではなく，抽象的な偏差値と自らの関係において生起するようなものとして捉えているのである。自分の相対的位置を示す数値と，それを上げるため，あるいは少なくとも下げないために克己心を保ち続ける自分との間で競争が自己完結しているという意味において，このような競争を「個人化された競争」と呼ぶことにしよう。

## Ⅲ 考察

前章では，これまで高校受験競争は「敵対的競争」的なものとして捉えられてきたが，それに反して東京においては「協調的競争」的な競争意識が見られたのはどうしてかという問題を，選抜システムとの関連に着目して検討してきた。その結果，次のようなメカニズムを見出すことができた。

第一に，東京の受験システムの特徴である受験対象校の多様性という要因から，受験競争が「学校外に開かれた競争」となっている。第二に，「学校外に開かれた競争」はマクロ的にはゼロ・サム・ゲームであったとしても，学校内部におけるゼロ・サム状態を緩和している。それゆえ第三に，中学生たちは受験に至る過程をクラスや学校の友達といった具体的な他者とつながる形で生起する敵対的競争としてではなく，抽象的な偏差値と自らの関係において生起するような「個人化された競争」として捉えている。このようなメカニズムによって，厳しい受験競争のなかにあっても，学校の友人は敵対的な競争相手としてではなく，仲間として入試という共通の目標に向けてお互いに切磋琢磨しあうような「協調的競争」的な競争意識が構築可能になるのである。

では次に，これらの知見から得られる示唆を考察しよう。まず第一に，受験競争の様相の探究における，選抜システムと個人との間に焦点を定めたアプローチの有効性である。高校受験競争は必ずしも全国一律に敵対的競争として構築されているのではない。また，従来「協調的競争」は，仲間の中からエリートが出ることを我がことのように思い込むといった意識や，選抜を社会の必要のために正当化するようなイデオロギーの存在によって説明されてきたが[49]，それだけでは地域によって協調的競争が作動したりしなかったりする偏差を十分に説明することはできない。そこで，都道府県ごとに見られる高校受験の選抜システムの相違に着目し，選抜システムと中学生の意識との相互関係に焦点化して考察するアプローチが有効になるのである。ここでは，このアプローチを「受験競争の社会的構成説」と呼ぼう。本稿ではこのアプローチを採用することで，東京のようなヴァリアントを産出するメカニズムを捉えることができた。さらに今

後，システムと個人との相互関係に焦点を当て，選抜システムによる受験競争の社会的構成という立場から異なる受験システムの下で生起している競争の比較検討をしていくならば，次の二つの貢献をなしうると思われる。一つは，各地域の中学生たちが経験しているさまざまな受験競争の実態の解明であり，もう一つはその解明を通して競争の類型やその分析軸の析出といった理論的課題に答えていくことである。また，そのような相互比較による相対化という作業を通してそれぞれの受験システムを反省的に捉え直すことは，システムの組み替えや再構築といった実践的課題に接近する足掛りともなりうるだろう。

第二の示唆は，選抜システムによって構成される競争と，中学校内で作り出される競争との分節化の可能性である。受験に至る過程を中学生たちが学校内の友達との競争として意識しない場合がある一方で，東京にも生徒たちが学校内の友達との競争を意識するような中学校がないわけではない。たとえば東京の公立中学校の生徒である滝本は，「受験って，ムゴイ」という題で期末テストにおいて学校の友達に対抗意識を燃やす級友の姿を描いている[50]。しかしその級友の姿は，中学校の教師が生徒たちに期末テストに向けて家庭学習をした時間を申告させ，その合計時間数の多い順に貼り出すという状況の中のものであった。この例に見られるように，中学校内部における競争状態は必ずしも選抜システム自体に由来するとは限らないのである[51]。実際，学校への生徒たちの関与を調達するために，教師たちが生徒を競争状態に置くという戦略をとる東京の中学校もあるという[52]。このように，学校内の競争主義的秩序の形態やその度合いは，中学校によって異なっていると考えられる。中学生の経験している「競争」の様相を明らかにしていくためには，中学校内の競争主義的秩序の構造を究明する必要がある。そのためには，学校内で見られる競争状態を，受験システム自体に由来するものと，受験と関連しつつ，あるいは関連なしに中学校内で作り出されるものとに分節化して考察していくことが有効だろう。その際には，同一受験システム内にある複数の中学校内における競争の比較検討が要求される。

上の示唆をも踏まえて，第三に受験競争を捉えるための分析枠組みが示唆されよう。まず，受験競争の基盤となるのが地域社会の競争主義的秩序の様相である。中学校を取り巻く地域社会には，競争主義的秩序の支配的な地域とそうではない地域がある。それはたとえば，地域の社会階層，通塾率，大学進学希望率などの指標によって把握されよう。次に，選抜システムの様相である。これは，受験対象校数と受験日程に影響される受験機会，公立と私立の高校数の割合，私立高校のステイタスなどの局面から捉えられよう[53]。さらに，受験競争に影響を及ぼす変数として，中学校内部の競争主義的秩序の様相が挙げられる。それは，競争主義的秩序を駆動するような，中学校内に設けられたさまざまな装置や教師による生徒たちの編制の仕方といった局面から捉えていくことができる。これら三つの位相と，受験競争に関する中学生の主観的な意識との相互関連を捉えていくことによって，中学生は誰とどのような競争をしているのか，それはいかなるメカニズムによって社会的に構成されているのかといった問題に接近することができるだろう。その作業によって各地域に関するモノグラフを蓄積していくことは，日本の高校受験競争に関する「ローカルで，オリジナルな理論」[54] の構築のみならず，これまで種々試みられ，現在も進行しつつある高校受験制度改革の評価や方向づけにも結びついていく可能性がある。

なお本稿のデータは，中学校の進路指導において偏差値の使われていた1992年度のものである。これまで考察してきた当時の状況は，偏差値使用が禁止された現在の状況を相対化するために有効である。当時と現在の状況は異なっているのかどうか，異なっているならばどのような相違があり，そこにはどのような要因が作用しているのか。それらの問題を検討し，現在の受験競争のありようを解明していくためには，過去と現在の状況の比較検討が要求される。また，現在の状況の追究という点に関して補足するならば，今回は考察の対象としなかったが，今後は，近年増えつつある推薦入学をも視野に入れて考察していく必要があろう。文部省の「高校改革の推進状況調査」によれば，1994年度入試では全国の公立高校入試の推薦入学枠が入学定員の１割を越えたという[55]。東京でも推薦入学制度は従来，都立高校の職業科などと私立高校のみで実施されていたが，1995年度からは都立高校の普通科でも取り入れられているのである[56]。

高校受験をめぐる状況は，選抜システムの多様化が進む中で今後ますます錯綜したものとなっていくだろう。それを解きほぐし，現在ほとんどすべての中学生たちが経験する受験競争のリアリティへと接近していくことは，現代の日本の学校社会の相貌を明らかにする試みの一端を担っている。

（指導教官　箕浦康子教授）

## 註

1）学校社会学研究会　1983　『受験体制をめぐる意識と行動　－

現代の学校文化に関する実証的研究』 伊藤忠記念財団調査研究報告書8。

2) たとえば総務庁は1992年に，業者テスト依存や過度な塾通いが，偏差値教育や受験競争を助長するとして文部省に対して勧告を行っている。

3) 竹内洋 1995 『日本のメリトクラシー 構造と心性』 東京大学出版会 第3章。

4) 自己選抜は苅谷が指摘している。苅谷剛彦 1986 「閉ざされた将来象 －教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』－」『教育社会学研究』 第41集 pp.95－109。

5) 竹内は日本の選抜システムの特徴として，この他にも層別競争移動や，メリトクラシーの信憑性構築戦略としてのリシャッフル型選抜規範などを挙げているが，それらは大学受験に関するものであり本稿の対象とする高校受験には該当しない。

6) 竹内洋 1988 『選抜社会 試験・昇進をめぐる＜加熱＞と＜冷却＞』 メディアファクトリー 第3章，第8章。

7) 竹内は「協同的競争」というタームも用いているが，ほぼ同様の意味で使われていると考えられる。竹内 前掲書（1988），pp.134－135。

8) 竹内 前掲書（1988），p.135。

9) 久冨善之 1993 『競争の教育 なぜ受験競争はかくも激化するのか』 労働旬報社 1章，2章。

10) 調査の概要については次節を参照。

11) 調査対象とした中学校の学校要覧の記載より。

12) 後述の「第2回調査」では，「進路を決定していく過程でクラスや学校の友達と競争関係にあると感じていたかどうか」という設問に対して，69.2%もの生徒が感じなかったと回答した（あまり感じなかった：37.4%；ほとんど感じなかった：31.8%）。

13) 「第2回調査」の「進路を決定していく過程において，友達と気持ちが離れてしまったり，関係が気まずくなったりしたことがあるか」という設問に対し，73.8%の生徒がなかったと答えている（あまりなかった：15.9%；ほとんどなかった：57.9%）。

14) 各都道府県の受験システムの仕組みについては，高校受験研究会 1993 『転勤者のための高校受験のしくみ』 日本実業出版社，今橋他編 1990 『内申書を考える』 日本評論社，読売新聞社 1992 『週刊読売・臨時増刊 お母さんが失敗しないための塾選び100情報』などを参考にした。

15) 竹内 前掲書（1995），pp.58－63，pp.97－100。

16) なお，固有名詞はすべて仮称である。

17) 佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク』 新曜社 pp.159－164。

18) 1992年12月から1993年8月まで，智子は2回，雄一は5回，和夫は4回の聞き取りをした。なお，調査の詳細については次の文献を参照。藤田武志 1994 『進路決定過程における「受験体制」の社会的構成 －中学生から「受験生」への移行とその解釈枠組み－』 東京大学大学院教育学研究科1993年度修士学位論文 未刊行。

19) 1992年12月から1993年1月にかけて，それぞれの母親に各1回ずつ聞き取りを行った。

20) 1992年9月から1993年3月にわたって，それぞれの教師に3回ずつ聞き取りを行った。

21) このことは，母親からだけではなく進路指導主任の教師からも聞かれた。

22) これ以外には，授業の補習を中心とした補習塾と答えた生徒が20.2%，進学コースと補習コースを合せもつ総合塾と答えた生徒が19.1%，授業についていけない人を対象にした救済塾と答えた生徒が2.6%，その他が5.2%であった。

23) 智子の母親は「うちは第1小出身なんですが（中略），第2小とか第3小が同じ学区なんです。で，あちらのほうは熱心で，かなり皆さん中学受験されたようなんですね，そうやって力をつけたお子さんが多いんで，ちょっと苦労しています」と語っている。

24) 母親は3人中2人が短大卒であった。

25) 総合選抜制度では，中学生は特定の高校ではなく学区に対して志願する。学区内の全高校の定員まで成績上位者から順に合格とされ，合格者は各高校へと振り分けられる。振り分けは成績順に行われる場合もあるが，高校間序列を生まないために主に通学の便を考慮して行われる（高校受験研究会 前掲書）。

26) 西田芳正 1991 「大人になる／生徒の目からみた学校生活」志水宏吉・徳田耕造編 『よみがえれ公立中学 尼崎「南」中学校のエスノグラフィー』 有信堂 pp.176－201。

27) 志水・徳田編 前掲書，p.219。

28) この制度の下では，学区はそれぞれ2つのグループに分割され，中学生はいずれかのグループに出願する。グループに属する高校全体の定員まで成績上位者から順に「グループ合格」とする点は一般的な総合選抜制と同様であるが，出願の際に第一志望校を指定する点と，「グループ合格」であっても志望校の定員外になった場合に次の志望校を順次指定していく点が異なっている。

29) 調査の時点では2名の生徒の進学先が未定であった。

30) 1992年度における東京の全日制の高校数は314校であり，全国平均の96.4校を大きく上回っている。文部省 1993 『平成4年度学校基本調査報告書』。

31) 文部省 前掲書。

32) 高校受験研究会 前掲書，p.11。なお，別日程で入試を行う高校も一部存在している。同，p.138。

33) 福岡県の進学塾への聞き取り調査による。

34) 1993年度入試は，1993年2月18・19・20日に行われた。

35) 高校受験研究会によれば，大阪府や福岡県も事情に大きな違いはない。ただし，京都府は公立高校入試において総合選抜制を採用していたことから，私立高校志向が強かったようである。しかし，近年の高校入試改革によって動向が変化しているという（高校受験研究会 前掲書）。

36) 私立高校というオールタナティブの存在は，都立高校入試に要求される内申点をめぐる過当競争を低減する効果も果たしていると考えられる。

37) 学校社会学研究会 前掲書，pp.113－117。

38) 乾彰夫・平塚眞樹 1994 「競争の社会的再編と地域」『季刊人間と教育』 4号 労働旬報社 p.151。

39) 乾・平塚 前掲論文，pp.151－154。

40) 三中の進路指導主任の教師は，親の世代の高校間序列と現在の序列が大きく違うにもかかわらず，親たちが古い序列感覚のまま進路相談に臨むために苦労すると語った。

41) 和夫の母親は，受験に関連して和夫が友達の話をする際には，学校の友達よりも，成績順にクラス分けのなされた塾の同じクラスの友達であることが多いと語っている。

42) 太田肇 1996 『個人尊重の組織論 －企業と組織の新しい関係』 中公新書 pp.85－89。

43) もっとも，このことが可能になるためには次の条件が必要だろう。第一に，多様な志望校の選択を可能にする交通の便のよさであり，第二に，都立高校よりも金銭的負担の高い私立高校の選択を可能にする所得の高さである。三中は副都心に位置することからも交通の便はかなりよく，受験対象校の選択範囲は大きい。また，三中の位置する区の所得水準は次の数値に見るようにかなり高い。所得格差の指標によれば全国平均を100とした場合，当該区は200前後であり東京23区の平均と比べても高水準である（朝日新聞社 1993 『民力 1993年度版』）。なお，上の数値を概数によって示したのは，三中の位置する区を特定されないようにという配慮からである。

44) 田原宏人 1994 「不自然な偏差値」 森田他編 『教育学年報3』 世織書房 pp.297－282。

45) これは必ずしも彼らが内申点を軽視していることを意味しない。実際，彼らは高校受験に直接影響する内申点の重要性を十分に

認識していた。それに対して，合否予測と志望校選択に関する信頼性の高い指標として偏差値を重視しているのである。

46) 藤田武志　1994　「中学生の進路決定過程に関する事例研究　－努力主義の採用と学校成績の層的認識－」　『東京大学教育学部紀要』　第34巻　pp.185－194。

47) この段の考察については，東京大学大学院の矢野博之氏との議論が参考になった。

48) この点についてインフォーマントたちは，学校の授業などを通して友達の勉強の具合や大まかな成績の状態などをある程度うかがい知ることができると語っていた。

49) 竹内　前掲書（1988），pp.42－51。

50) 滝本久美子　1996　『私，たたかう中学生』　ＫＫロングセラーズ。

51) このような事態は「学校システムの過剰性」として捉えられよう。苅谷　前掲論文。

52) 山田真紀　1996　『中学校における学校行事のエスノグラフィー－活動の形態と生徒の関与を中心に－』　東京大学大学院教育学研究科1995年度修士学位論文　未刊行。

53) この点について今後さらに細かく見ていくならば，内申書記載事項の相違や受験科目，選抜における内申書の割合といった局面も考慮に入れる必要があろう。

54) 園田英弘　1991　「逆欠如理論」　『教育社会学研究』　第49集　pp. 9 －33。

55) 朝日新聞1995年１月25日付け夕刊による。

56) 東京都教育委員会　1996　『東京都の教育（平成７年度版）』。